

広場の孤独

—— 映画文学人生論

原作：堀田善衛 (1951) 「中央公論社」
参考：歴史 (1953) 「新潮」
インドで考えたこと (1957) 「岩波新書」
方丈記私記 (1971) 「筑摩書房」
19階日本横丁 (1972) (「朝日新聞社」
定家明月記私抄 (1986-88) 「新潮社」

訳しながら、彼は電文中の Commitment という言葉にぶつつかって鉛筆をおいた

戦後派の作家のなかで、ほんとうに読む価値がある作家がいるとして、一人だけあげるとすれば誰だろう。もしかすると堀田善衛？

といっても、『インドで考えたこと』『方丈記私記』『19階日本横丁』『定家明月記私抄』を読んだだけで、そんな気がしたにすぎない。肝心の小説は何も読んでいなかった。彼の小説はいかにも難解で、とっつきが悪そうにみえる。

そこで、意を決し、あらためて、まず、『広場の孤独』を読んだ。時は朝鮮戦争が勃発した昭和二十五年、主人公の木垣はある新聞社の渉外部の臨時雇員となって、挑戦の前線から入ってくる英文のニュースを日本語に翻訳している。

訳しながら、ふと彼は電文中の Commitment という言葉にぶつつかって鉛筆をおいた。「Commitment・過ナドヲ行ウ。為ス、犯ス、……一 身ヲ任セル、危クスル、言質ヲトラレル、引キ渡ス―翻訳機械のようになった頭は、この言葉にあてはまるべき訳語を次から次へと自動的にひき出していったが、その自動作用が漸時弱まってくる、と、彼は、いまこんな仕事をしていること自体、それは既に何かの Commitment をしてしまったことになるのではないか、という背筋に或る冷たいものの流れるような反省が湧き起こって来た。

新聞社内の会話で、「敵機動部隊は……」と



広場の孤独

映画文学人生論

いう声が聞こえてくる。敵？敵とは何か、北朝鮮軍は日本の敵か？「ちよつと、ちよつと、北朝鮮共産軍を敵と訳すことになっているんですか？それとも原文にエネミイとなっているんですか？」

日本は憲法によつて戦争を放棄したはずだが、木垣は自分がすでに朝鮮戦争で交戦中の一方の側にコミットしていると思う。対立を深める一方の考え方や恐怖からは多幸な未来は生まれえない。彼はサルトルやジイドのように未来への道をひらくために考えるだけは考えねばならぬと思う。

アメリカの探偵小説やスリラー小説のなかで一冊の本が木垣の眼をひいた。ニュー・ヨークのタイムス・スクエアらしい交差点のど真ん中に、ぼんやりと立ちすくんだ男を描いた本で、その題名は「Stranger in Town」『巷の異邦人』。

それを見て、木垣は任意のStrangerを主人公にして「小説」を書いてみたらどうかと思った。この任意の人物が、周囲の交叉し対立する現実に対応しつつおのれの立場を選ぶ。予見不能の地域、颯風の眼。それは人間にあつては魂と呼ばれるものではないか。もしそれが死んでいるならば、呼びかえさねばならぬ。この魂の持主は位置決定によつて、任意の人物から特定の人物になる。

小説の題名は、Stranger in Town を意識して、広場の孤独。難解だが、一読の価値ありや？

紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ

藤原定家